
HUM@NOID

湊尾陽深と友人T

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HUM@NOID

【Nコード】

N5719U

【作者名】

湊尾陽深と友人T

【あらすじ】

俺は、今回のことで学んだことがある。

まず、俺が住む町、人間市は外界との交流がないこと。

次に、ヒューマノイドなる存在がたくさんいること。

そして、独自の軍事力を持つ市役所があること。

最後に、知らない人から電話がかかってきたら取ってはいけないうてことだ。

ブログおよび第一章（前書き）

小説ではありません。この話が書かれるきっかけの話を書くだけですっ！！

それは一通のメールから始まった。

T『自動販売機とか擬人化できないかな？』

俺『いいんじゃない？』

T『よし、じゃあ俺今から設定考えるから原文宜しく。俺文章書けない』

俺『え？いや、はっ！？意味わかんないんだけど？』

T『俺の作文の点数最悪だぜ？』

俺『だからどうした』

T『というわけでよろしく〜』

設定資料が送られてきますた^ ^

プロローグおよび第一章

『プロローグおよび第一章』

俺が住んでいる世界の話をしよう。

時は、少し未来とも呼べる。西暦に表せるなら多分、三〇五〇年くらい。

何故、くらいなのかというと、現代は西暦も使われなくなってしまったから、と言えば分かるだろうか。

それは数十年前の事であった。世界は、とある事件をきっかけに混乱状態に陥った。そして一九四力国も在った国々がお互いを吸収し合い、今ではたったの五力国しか無くなってしまっていた。日本も例外ではなく、五力国の内の一つとして吸収されてしまっている。しかし、吸収されたと言っても、各国の文化は未だ根強く残っているものであしからず。

さて、混乱した世の中が落ち着きを取り戻し始め、吸収された日本には色々な国の人間が移住してきた。

そして、日本からも他の国へと移住する人が増えた。

この世の中で、血が混じっていない、純血な日本人は希少価値と なったのだ。

そして、この俺もその希少価値な人間の一人な訳で。

ここ、人間市は第一国家の一つ、日本のとある田舎に属している。と言っても、人間市は都市伝説の一つとなっていて、外界との接触は断絶していると言っても過言ではない。

そして、都市伝説と言えばもう一つ。この街ではヒューマノイドと呼ばれる人間機械が多数存在している。しかしその存在は他の国には隠し通されていて、知っているのはこの街に住む俺たちしかない。

さて、ヒューマノイドについての説明をしておこう。

ヒューマノイド。それは二十年前　まだ日本が吸収されずに戦争をしている頃、この街出身の女博士、関ヶ原戦へせきがはらいくさ」という人間が、極秘に開発したテクノロジーの事だ。彼女は、そのプロジェクトの名を【計画】として、この街の市長にもこの国のトップにも極秘に立ち上げる。

そして、そのプロジェクトは成功を収める事になる。すぐさまこのプロジェクトを世間に晒す時が来ると思われた。しかし、市長にこのプロジェクトを発表はしたが、日本という国には晒さなかった。その理由は、今でも分かっていない。

彼女は、プロジェクトをこの街にだけ公表した。そして、プロジェクトの表だった試行を目的とした大がかりな実験をした。街の人口の約三分の一である五千人を対象に、彼らをヒューマノイドとしたのである。それらは後に《第一世代》《ファースト》と呼ばれるようになり、今この街の人の殆どがそうである、《第二世代》《セカンド》、《第三世代》《サード》の大元となった。

ちなみに、《第一世代》はシンプルな機械を取り込んだ、いわばヒューマノイドやアンドロイドとは違った、表から見ても機械だと分かる人間機械のことだ。

《第二世代》は、《第一世代》を改良した、職業を重視したそれこそサイボーグと呼べるものの事だ。自動販売機や、テレビなどという珍しいものもある。

そして《第三世代》。彼らは軍事目的のためだけに作り出された。いわば、彼らこそ本物のヒューマノイドと呼ばれるべき存在。《第一世代》 関ヶ原戦が開発した当初のアルゴリズムを無視し、《第二世代》の技術を生かしたヒューマノイドとなった。彼らは、そのためにプライドも高い。《第一世代》、《第二世代》を小馬鹿にしたような態度で接してくるのである。あと、《第三世代》は高校を卒業後、必ず管理局直属の部隊に入らなければならないという決まりがあつてめんどくさかつたりもする。

とまあこんな風に、彼らは人間市の半数以上を占めていて、今では人口の七割はヒューマノイドだ。最近なんかは、管理局が《第四世代》《フォース》なるものを作り始めたとかいう話も出てきているのだが、その辺りは不明瞭のまま都市伝説化してきている。

そして俺、秋風大和《あきかぜひろかず》は純潔な日本人というだけでなくヒューマノイドですらない、という非常に珍しい位置にいる訳であつて。勿論、そんな俺に奇異な視線を送るヤツもいると言えはいるのだが、そう言う奴らは全て無視している。・・・途中から何言ってるのか分かんなくなってきた。

というわけで俺もよく分からない、完全に巻き込まれたと言っても過言ではない事件を紐解いていくとしようか。

七月三十日日曜日、つまりは夏休みの内の一日の朝
それは、ある一本の電話から始まった。

電話の主は、自らを椎句《しいく》（漢字は、多分こう）と呼ん

だ。

「……で、一体何者ですか？」

『だから椎句と呼んでいるじゃない。まあ、私もあなたの立場にいたしたら疑うか、電話を切るかしてたけどね』

声の主は女性だ。

「……切ったらダメって言ったのはそっちじゃないですか」

『まあそれはそうなんだけど。で、本題よ』

「はい」

あまりに話の流れが掴みにくい人だ、と思った。

『この番号は登録しといて。してなかったらあとで家焼き払うから。あと、今から言う事は誰にも言っちゃダメよ。多分、あなたが消されるわね、管理局に』

「はあ……。えっ？ いや、意味が分からないんですが」

「っていうか家焼き払うってなにっ!？」

『まあ、あなたが言わなければ良いだけの話だし、それにあなたの口の堅さを信じてこの電話をしたのだしね』

それは喜ぶべきなのだろうか……。

返答に困っていると、彼女が先に口を開いた。

『つと、今から暇？』

「いや、意味が分からないです」

『そのままの意味よ。暇なら今から来て欲しい場所があるの』

「は、はあ……」

『それじゃあ、一高の裏山は分かるわよね？』

「はい、分かります。広すぎてアレですけど」

一高とは、この人間市唯一の高校で、実際には人間市立第一高等学校という。

そしてこの人間市は山に囲まれていて出れなくなっている。これも外界と遮断されてしまった原因のひとつで、何でもここで生まれたものは山を越えられなくなっているらしい。

『その頂上の神社に来てほしいのよ』

「ああ、人間神社ですね？」

山の頂上にある神社といえば、人間神社しかないだろう。そこで
の夏祭りや、肝試しは有名だ。

「そこに行つて何をするんです？」

『うん・・・、なんていうか。あ、肝試しって言った方がいい
かしら？』

「き、肝試し、ですか？」

『そうよ、そう言った方が適切なただけだけどね』
そうですか・・・。

「それで、いつ行けばいいんです？」

俺は、この答えを予想してなかった・・・。

『さっき言ったでしょ？今からって』

なんてこつた。あ、一応番号は登録しておいた。家焼き払われた
くないしね。

（約一時間後）

ハイ、どうも。皆さんおはよう・・・じゃないな、もう昼だな。つ
ーことでごんにちは。こちらは秋風大和です。

さて、現在俺の状態は大変な事になっております。正直言って死ぬ
かもしれません。もう笑っちゃうくらい大変です（笑）。ハハハ。
さて、どういう事かという・・・まあ今から約一時間くらい前ま
では普通にこの山の急な階段をひいひい言いながら登ってたんだが
・・・。

まあ詳しく言うとこんな感じだ。

（約一時間前）

「・・・ハアツ・・・ハアツ・・・」

この階段。頂上まで約五千段はあるのだが、ものすごく急な階段で有名だ。足が悪くなってるじいちゃんばあちゃん可哀相だな、と思うくらい。というか、バリアフリーというものを考えなかったのだろうか？昔の人たちは。

俺でもキツイのだから、高齢者の方達はさぞつらいに違いない。でも、盆踊りとか頂上にいる年寄りの人、結構居たりする。なんでだろう？

そんな事を思いながら、俺は黙々と上に登っていく。

黙々と登って二十分。ようやく俺は頂上に達した。

「・・・やっと・・・着いた」

俺は完全に息が絶えてしまっていた。流石にキツイ。

鳥居をくぐって中に入る。

ブワアツ。いつものこの感じ。

ここに入ると毎回周りの雰囲気が変わる気がする。多分気のせいだろうが、この雰囲気は好きだ。

一応ここまで来たんだからお賽銭くらいは、と思いき賽銭箱の方まで歩こうとしたとき、俺はその開いてるはずのないそれを見てしまった。

「・・・え？」

俺の頭の中は真っ白になった。

なぜか？

それは、開いているはずのない、開くはずのない、俺の知る限り開いた事のない社の扉が　　完全とまではいかないが　　、開いていたからだ。

目の前の光景に、俺は呆然とするしかなかった。

興味本位で中を覗いてみる。真っ暗だ。何かあると思ったけど開いている場所以外、光が差し込んでこないので真っ暗になっている。ジイツと見ていると中でガサツと何かが動いた。

なんかやばいような気がする。見てはいけないものを見てしまった感じ。

周りを見してみる。椎孔さんはまだ来ない。

すると、俺の携帯が p i p p i . . . と鳴った。

画面には【椎孔さん】の文字。
出る。

『あ、大和君。今どこ？』

「あ、椎孔さん。なんで居ないんですか？もう着きましたよ、神社。なんかいつもと違いますけど」

『そう。それよりそっちに黒いスーツ着た男の人たち向かってるからさ』

『. . . は？』

それってやばいんじゃないだろうか。

俺はいつもは使わない頭をフル回転させる。全然椎孔さんが何を言っているのかが分からないくらいに。

色々考えた末、たどり着いた結論は. . . 俺死ぬだろうからとらあえず逃げろっ！

急いで振り向く俺。すると、ドンツと何か黒くて大きい物体にぶつかった。

背中に百足が何匹も走ったような悪寒を感じる。

(やばい. . . やばいやばいやばいッ！)

俺はその場から全力で逃げ出した。階段の方に。

階段の手前まで来ると、下から黒いスーツを着た男達がぞろぞろ

と登ってくるのが見えた。

これじゃあ階段からは逃げられない。

とっさの判断で俺は携帯を切つてズボンのポケットに入れ、森の中に逃げ込む。

俺の後ろにいた男は、階段の方に向かって叫んでいた。

「オイッ！森の中に入つちまったぞっ！」

俺は森の中を走る。転びかける。走る。躓く。走る。転ぶ。起きあがって再び走る。走る。走る走る走る走る。

～現在～

とまあそんなこんなで今、俺は森の中にいます。樹の裏にへばり付いて隠れた、と思っっています。少なくともそう思っています。

しかも、森の中で電波が使えない。圏外だ。どこにいるのかも分からない有様。死んだな、俺。死亡フラグ立ちまくりだ。

周りに誰もいない事を確認し、坂道になっているところを逆らわずに走ることにした。そうすれば自然に麓には着くだろう。

予想は当たった。途中で崖みたいになっているところで躓いたのだ。そのせいで俺は下に転がり落ちる。今日は何回転んだのだろうか。

膝の擦り傷がさつきから木の枝に引っかかってすごく痛い。

すると突然、パツ。と一気に周りが明るくなる。今日は快晴の青空、雲一つない完全な晴天。すごくキレイだ、そう思った。

そして、そんな死亡フラグが立ちまくる思考回路は、ドカッというアスファルトに頭を思いつきり打ち付けた反動で断ち切れた。なんか時間がものすごく長く感じたのは気のせいだろうか。

「~~~~~」

「

さすがにアスファルトは痛かった。木の枝よりずっと。ま、当然だとは思っけど。

打ち付けた頭をさすりながら周りの状況を確認する。人はいない。どうやら恐山の麓の道路まで出たようだ。

俺が躓いたところは崖崩れしないように、アスファルトに固められているところの境目みただった。打ち付けたところからは血も出てない。

「・・・さてと」

とりあえずこのまま自転車を停めたコンビニまで行くとあいつらが居るかもしれないだろうから近づかない方が賢明だと思う。仕方がない。自転車は後で取りに行くとして、家とは正反対だけど駅の方に行くでしょう。

走っとかないと後ろから追ってきた場合怖いな、と思い、俺は駅まで走る事にした。

（少し前）

「・・・切れちゃった。大和君は話聞いてたのかしら？」

多分聞いてなかっただろう、と思いつつ、少し笑う。

（・・・なんだかこのまま泳がせてもいい気がしてきたわ）

騒がしいバーのカウンターには自嘲気味に笑う女性が独り、佇んでいた。

「・・・ハアツ・・・ハアツ・・・」

俺は駅前の大通りを走っていた。一応、人間大通りと正式な名前がある。

とりあえず後ろからは追っ手は来ないが、走り続けることにした。

(・・・それにしても)

やはりヒューマノイドが多い。

いや、俺の通っている学校もヒューマノイドだらけなのだけど・・・

そんなことを考えていると、俺は角を曲がったところで、そこに立っていた誰かにぶつかってしまった。

「　　ったぁ・・・」

「あ、だ、大丈夫ですかっ?」

ぶつかった相手は・・・・・・・・・ヒューマノイド?

しかもそのヒューマノイドの彼女は倒れもせず少しししゃがんで手を差し伸べてきた。

無様に地べたに転げてしまった。どちらがどちらの台詞を吐いたのかは言うまでもないだろう。

「・・・あ、ご、ごめんなさい。ありがとうございます」

「ごっ、こちらこそ、こんなところでポーッと突っ立ってたら邪魔でしたよねっ?」

ごめんなさい、と深々と彼女は頭を下げる。

彼女は俺よりも随分小さく動作の一つ一つがかわいらしかった。

顔も・・・まあ、ロリ顔ってヤツだ。十代前半つてところだろうか?

「あの、私、伊藤園《いとうその》って言います。ここに立っていたのは仕事のせいなので、痛し型無いのですが、ホントにごめんなさいっ!」

彼女に合わせて、つつい敬語になってしまう。

「い、いえいえこちらこそ悪かったです。俺は秋風大和です。頭を上げて」

すると彼女は声のトーンを下げ、俺に少し冷たい目を向けて言っ

た。

「・・・あの」

「ハイ？」

「大和さん、私の事年下だと思ってませんか？」

「へ？」

違うのだろうか？外見からして十代前半くらいにしか見えないのだけだ。

「私、よく外見から小学生くらいに間違えられるんですが、これでも歴とした三十代ですよ」

「・・・。。頭が真っ白になった。へ？三十代？ほんとに？」

「・・・疑ってるんですね？」

「え？や、その・・・ハイ」

いや、これで三十代とか言われても信じる人は居ないだろう。

信じられない。俺の中の世界の常識というモノが変わった。こういう人間って小説やマンガの世界だけだと思ってた。

すると、そんな俺の携帯が鳴った。

この電子音。椎孔さんだ。

「すみません、俺のです。」

p.i.....

「もしもし？」

『あなた、さっき電話切ったでしょ？』

「え？あ.....」

そつえば流れる作業でやってしまった気がする。

「す、すみません。黒ずくめの男達が追っかけてきたもので・・・」

『「・・・やつば話聞いてなかったか』

ハア・・・というため息が携帯の向こうから聞こえる。何だろう

？俺なんか悪い事したのか？すごく白い眼で見られている気がする。

『ま、いいわ。それより今どこ？』

「今は駅の近くに居ます。南口の方ですね」

『そう。ならちようどいいわ。今から言つとこに来てもらえる？
速攻でよ』

そう言つて椎孔さんは俺に場所を指定する。

「ハイ、分かりました。今から向かいます」

そう言つて今回は（いや、も、か）こつちが切つた。

「それじゃあ今からちよつと行かなきゃいけないところがあるの

で 「私も連れてつて下さいっ」 . . . は？」

途中で遮られた。彼女は頭を深々と下げている。

「お願い。私も今すぐく暇なんです。それにさっきの罰です。勝

手なお願ひとは分かつてますけど連れてつて」

おねだりする子供よろしく彼女はそう言つてきた。

「いや、まあそんな事言われたつて. . .」

「一人で来い、なんて言われてないんですよねっ？お願いします

っ

さっきのように深々と頭を下げてくる園さん。ま、確かに一人で
来いだなんて言われてないし、彼女の責任で来た事にすれば良いか？

「それじゃあ付いてきても良いですけど、園さんの責任でお願い
しますよ？」

そう言つと彼女はパアツと顔を輝かせた。すごく綺麗だと思つた。

「ありがとうございますっ！」

そうして、俺とこの暇人ロリ顔ヒューマノイドのパーティーは椎孔
さんとの約束した場所に向かい始めた。

ココハドコ？

誰か教工テ. . .。

彼女は問う。

しかし、誰もそのことに気が付かない。
ただそれだけ。

プロローグおよび第一章（後書き）

始まりは友人Tが伊藤園の喋る自販機を見てからだつた

！

ええと、多分誰も読んでないと思ってますけど、はじめまして。湊尾陽深なる者です。

この作品が処女作品になりますね。

僕がストーリーの元で、主な設定とかは友人Tに全て任せています。この後、戦闘機の擬人化されたヤツとか出てきますが、その辺は全て友人Tです。

ええと、これからも宜しくお願いします。誰も見てないだろうけどなっ！！

第二章

『第二章』

）。）。有線の音楽が流れる。

店内は、お昼時を過ぎているにもかかわらず、混んでいた。

俺は店内を見回すが、椎孔さんらしき人物は居ない。そして俺の横には、お昼を食べていないのか目を爛々と輝かせている園さんが居る。ねだつてくるような視線を感じるものだからやるせない。

仕方なく聞いてみる事にした。

「・・・あの、園さん？お昼、何食べましたか？」

「え？や、な、何も食べてません・・・」

彼女は恥ずかしそうに答える。予想は当たった。

「・・・食べたいんですね？」

「奢つてくれるんですか？」

下を向いていた首が勢いよくこっちを向いた。というか、ホントに何も食べてなかったんですね・・・。

「・・・仕方がないですね」

「やったあつ！」

仕方なく奢る事にする。子供じゃないかってくらいのはしゃぎっぷり。こんなはしゃぎ方、最近の子供でもしないって・・・多分。

「それで？何が欲し「え、えつとねえつとね、まずこれでしょ？

あと、これにこれに・・・これと・・・あ！あとこれもですっ！」

・・・

ペアアツと輝く笑顔。俺のターン即終了。途中で入られました、ハイ。しかも注文する量が異常に多い。遠慮無い。流石つと言いたい気分だね。実に清々しいや。

「（・・・まあ奢りますけど）」と園さんには聞こえない音量で

眩く。

そして俺は店員さんの方を振り向く、ことは出来なかった。振り向こうとした先には、というよりも俺の目の前には全然知らない顔があつたからだ。警戒しながらも、俺は口を開く。

「……………誰ですか？あなた」

俺の目の前に突如現れたその女性は、とても華奢な身体つきで黒髪ショートヘア、身長は成人女性の平均のそれくらいだと思う。悪いがあまり強弱の付いていない体つきだった。服装はいかにも軍人してますって感じの軍服だった。《第三世代》のヒューマノイドみたいだな。……………ヒューマノイド？

そんな彼女は静かに口を開き、俺の質問に静かに答えた。

「……………椎孔さんの命令であなたを迎えに来ました。私は日ノ本紫《ひのもとゆかり》と言います。紫とお呼びください」

「……………どうやら園さんに奢るのはもつと後になりそうだな。それで、そちらの方は？話ではあなた一人としか聞いておりませんが」

「あ、彼女はたまたま駅前のところで出会ったんですよ。丁度、椎孔さんからの電話の時に」

「そうですね。……………彼女はヒューマノイドのようですね」

紫さんは園さんに聞こえない音量で言った。

「……………そうみたいです」

園さんの方を見ながら俺も同じくらいの音量で答える。園さんはキョトンとしている。

「彼女も付いてくるのですか？よろしいですが、スパイを匂わせるような動作をしたら、すぐにでも、消しますが」

「……………。俺は静かにかつ、すぐに紫さんの方を向く……………今なんて言った。消す？俺は反射的に言う。」

「……………ちよつと、それどうゆうことか説明して下さい」

「……………椎孔さんはあなたに説明していませんでしたか……………とりあえずここで説明すると色々やっかいな事になります。お話は

ここを出てからにさせてください。とにかく椎孔さんのところに案内させて下さい」

「なんでここじゃあダメなんですか？」

俺は食いつく。

「それもここでは言えません」

はあ？なんだ、それ。

俺はここで吹っ切れてしまった。完全にスイッチが入ってしまう。

「ふざけんのもいい加減にして下さいよ？第一、俺はあんたが何者なのかも知らないんだっ。それでいきなり付いてこいとかふざけてんじゃないんですかっ？」

つい、声を張り上げてしまう。感情的になっっているのは自分でも分かるが、だけどこれだけは譲れない。譲りたくなかった自分が居た。

「……………店に迷惑です。それに私はここでは言えないと言っただけです。教えられない、とは誰も言ってます」

「……………」

確かにそうだった。バツカじゃねえの、俺。

店の客は全員と言って良いほど、みんな俺の方を怪訝な顔をして見ている。

それに確かに教えないとは誰も一言も言っていないかった。

「……………ごめんなさい。取り乱しました」

「いえ、分かってくれば良いです。それに、こちらも言い方が悪すぎました」

彼女は頭を下げてる。完全に俺の方が悪いのに。俺の方が下げなければいけないのに。くそっ。

そして彼女は頭を上げてこう言った。

「では、改めてあなた方二人をご案内します。詳しくは道中でもう付いていくしか選択肢は無かった。」

「つまり、あなた方はレジスタンスのメンバーということですか？」

「平たく言えばそうなります」

俺たちは案内人、日ノ本紫さんに付いて、椎孔さんの居場所まで連れて行ってもらった。

そして、さっき聞きたかったことを聞いている。

説明をするとこんな感じ、だろうか。

まず、今言っていたレジスタンスについて。

レジスタンスのリーダーである椎孔さんを中心に、約百人もの人間とヒューマノイド達が居て、割合的に言つと四対六。人間四のヒューマノイド六だそう。ヒューマノイドの主が《第三世代》。園さんは《第二世代》らしい。

で、この紫さんは予想通りヒューマノイドの《第三世代》でレジスタンスの要である軍隊の第二飛翔隊の隊長だそう。

レジスタンスの軍は第一飛翔隊から第五飛翔隊までであるという。

はつきり言つて想像がつかないが、まあ自衛隊みたいなものらしい。

このレジスタンス名はI・X・A（ilk・X・X・able）。意味は百人の有能な同類。そのままだ。

I・X・Aの目的は政府直轄の管理局に対抗するとかなんとか。

つか、管理局つてそんなにすごかったのか？あそこは一般的に市役所扱いだ。

「てゆうか椎孔さんがそんなに偉かったなんて・・・想像がつかないですよ。世も末ですね」

「そんな事はありませんっ！」

紫さんがすごい形相で叫んだ。・・・び、吃驚した。

「あ、す、すいません。つい、椎孔さんの悪口みたいなのを言われたので」

「い、いえこつちこそすいません・・・」

(悪口だったのになあ)とは正直言えない。つか、言ったら終わりだ。

そして椎孔さんの悪口は彼女の前では禁句だな。《第三世代》の餌食になつちやうや。

あと園さんの事は、

「とりあえず彼女が何もないタダの一般人のようですね。」と紫さんが言っていたので問題はないだろう。殺されなくて良かった良かった。

俺たちは暫く歩いていくと、路地裏に入った。

「この路地の先の建物の中で、椎孔さんはお待ちしております」

「へえ〜」

俺は生まれも育ちもずっとここだが、こんなところがあったなんて今日初めて知った。正直驚いた。知らないところなんて無いと思っていたのに。

・・・あれ？そういえばさっきのここ出てから園さんが喋ってないような気がする。

気になって園さんの方を向いてみると、園さんは、

「むう~~~~~~~~」

・・・拗ねていた。

「あの、園さん？」

「っーん」

あんたはガキかっーの。

「・・・あとでなんか奢りますよ」

ハア・・・とため息を吐く。だから俺、今日だけで何回ため息吐けば良いんだよ。俺の幸運スツカラカンじゃないだろうか？いや、本当に。

「で、いつになったら着くんですか？」と俺は紫さんに聞いてみる。

「・・・もうすぐで着きますよ。食べ物もあります」

（あ、これ園さん元気になるんじゃないあ・・・）と振り向くと案の定、園さんは元気になっていた。

今度は鼻歌を歌い始めたくらいだ。

「・・・操りやすいですね」

紫さんは目を少し細め言っている。紫さん怖いよっ？確かに操りやすいだろうけどそれは怖いって！

「・・・着きました」

おっと、一人コントをしている内に着いたようだ。

そこは裏口みたいになっていて、建物自体はそんなに上には延びていない。紫さんの話によると下に延びているらしいが。

紫さんは裏口の扉の横についている暗証番号式のロックを外すと扉を開けてくれた。

「さあ、お入り下さい。カウンターへと繋がっています」カウンター？居酒屋みたいにもなっているのだろうか？

言われるがままに俺と園さんは中に入っていく。

扉の奥はまだ通路になっていて、その奥にもう一つ扉があるみたいだ。

「暗証番号は193です」

そのままだな、オイ。

言われたとおりの番号を入力すると、ガチャッ。と音がした。どうやら鍵があいたみたいだ。

扉を開けて中に入ると俺の周りが一気に騒音に囲まれた。

「オオツ！やっと来ましたかつ！主役！」

「待つてましたよお！」

「おっせえぞっ！」

「あの番人達から逃げ回ったんだってなっ！」
等々。

正直、呆然としてしまった。

ふと我に返り、園さんのほうをしてみる。彼女も呆然と立っていた。口を開けていて実に可愛い。

「やっと来たか、逃亡話ガン無視少年」

聞き慣れた声があった。右の方から。振り向きたくはないが、どんな人か見てみたい気もする複雑な気持ちに襲われてしまった。

「ていうか、遅すぎるわ。番人達に連れてきてもらう予定だったのに、結局ゆかりんに頼んじやっただじゃない」

「……………はじめましてって言った方がいいんですか？これ」

「ま、はじめましてでいいと思うわよ。多分」

そして、俺は彼女、椎孔さんの方へと顔を向ける。黒い髪を後ろで束ねていて顔立ちも整ったかなりの美人。身長も高く、大人な感じだけど雰囲気からして自由奔放って感じがした。

「改めてはじめまして。私の事は椎孔って呼んで。みんなにもそう呼ばせているわ。ていうかそう呼べ。呼びなさい。命令よ」

いや、命令かよ。

「はじめまして……………椎孔さん。俺が大和です」

「で、彼女は……………っ!？」

椎孔さんはなぜか園さんを見て、驚いていた。と同時に表情には安堵感も見えたような気がした。

「そう、あなたも助かったのね……………でもヒューマノイドに……………」

……………」

「?？」

園さんは当然ポカンとしていた。

「さて、それじゃあメンバーも集まった事だし、今から二人の入隊記念パーティー始めるよっ!」

一応、園さんの欲求不満も解消されるみたいだ。

……………入隊？

くとある研究所での出来事

ポコポコ……。

十二歳くらいの少女が入った容器の中で複数の気泡が浮かび上がる。

(……ここは?)

少女は目を開けずに心の中で問う。

しかし、その問いには誰も答えられない。

(……はなしごえが、きこえる)

確かに彼女の入った容器の前では、研究員らしき白衣を着た男達が話していた。

だが、常人の耳には聞こえるはずがなかった。分厚いガラス管に覆われて、更に水の中なのだから聞こえるはずもない。しかも彼女は目を開けていないから、彼らの事は分からないはずだった。

しかし、彼女は研究員が何人居るかも分かったし、何を話しているのかも完全に聞こえていた。

勿論、彼ら研究員は彼女が起きている事を知らない。

「例の《第四世代》の開発は順調に進んでいるようだな」

「はい、手筈通りに進んでいます」

「ということは、あとは彼女が起きるのを待つだけ、という事か？」

「いえ、もうひとつ、L・B・01専用の通常装備のメンテナンスと調整が残っております」

「そうか、それじゃあL・B・01が目を覚ますまでに終わらせる」

「ハイ」

(……後は彼女が起きるのを待つだけだ)

研究員達は知らなかった。彼女はもう目覚めている事を。まあ知

るはずもないのだが。

(・・・・・・・・とにかくねむい。ねよう)

その少女・L・B-01が次に起きるのはかなり後の話になる。

外はもう完全に真つ暗。時刻はすでに十時を回っていた。

俺は家に帰ってきて、今はベッドの上で開け放たれた窓からの風に当たっていた。

(それにしても・・・・)と俺は思う。

俺は椎孔さんや園さんに昔、会った事があるような気がしていた。まあ、そんな違和感は家に帰ってきてから気づいたのだが。

サアアツ。部屋に風が入ってきた。良い風だ。

俺は家に帰ってきてから今の今まで、I・X・Aの事についても考えてはいた。

対政府反抗組織、I・X・A。

リーダーであり、研究者のチーフ　　というのはパーティー中に本人から聞いた　　でもある椎孔さんを中心に広がっている百人弱のレジスタンス。

主な構成メンバーは《第三世代》のヒューマノイドとはいえ、二番目に多いのは《第一世代》だった。その中でも日ノ本姉妹は特に群を抜いているらしい。紫さんはその妹の方。モデルは紫電改。

他にも色々居るらしいんだが、今日は違うところで訓練をしているらしい。今度紹介してくれるとありがたいね。

あ、そうそう。言い忘れてたが、驚いた事に今日昼間に追いかけてきた黒ずくめの男達もメンバーらしい。椎孔さんに「話を聞かないからだ」と言われてしまった。

・・・・・・・・とりあえず今日のまとめはこんな感じだろ

うか。多分こんな感じだと思う。

よし、眠いからさっさと寝よう。それがいい。

そして俺は、永く感じられた今日という一日に終止符を打った。

そして彼女は眠りについた。

ただそれだけ。

それだけの事である。

第二章（後書き）

すいません。そういえば言っの忘れていましたが、主人公には義理の妹がいる設定です。
少なくともそうなっています。

次の話でうっすらとだけ出てきますけどね。

第三章

『第三章』

翌日。日付で表すと七月三十一日月曜日。つまりは七月最終日な今日。

色んな蝉の声がよく聞こえる。つか、五月蠅いくらいだから聞こえなくても良いと正直思う。天気は快晴。雲一つない快晴。この日こそ日本晴れという言葉がふさわしいだろう。カラッとしてやがる。そして……俺のテンションは最低だ。低空飛行を続けている。

理由は単純明快。

昨日、結局眠れなかったからだ。なんか終止符を打ったとか偉そうな事をほざいてたけど、寝てません。気づいたら日が昇ってました。

さらに、俺の誕生日でもある。

だから、今ものすごい機嫌が悪い。義妹も今日は俺の部屋に乗り込んでこない。この空気を読んだのだろうか。それなら俺はヤツを褒め称えても良いくらいだと思う。

ただ、彼女は空気を讀まなかった。俺の睡眠を妨害した張本人

本人に非は無いのだが　である彼女は、俺がようやく眠

りにつけた瞬間を狙って電話をかけてきやがった。（そんなことはない。ただのこじつけ）

シカトしてやろうと思ったけど、一応出てやる。

ピッ。

「……………もしもし」

「あれ？なんか今日、やけにテンション低くない？何？寝てた？それとも相手が私だったからなの？あなたは人によって態度を変え

「ちやうの？」

「……………眠いだけです。というか、今俺の安眠を妨害した張本人ですよ、あなた」

「そんな人が寝てる時間なんて把握できるはず無いじゃない。バカ？」

「こういう人にこんな事を言われるとムカつくのは俺だけだろうか。出来る事ならばっこぼこにしてやりたい。」

「……………それで、何の用ですか？用がないんでしたら切りますよ？」

「ちやんと用ならあるわ。大和君、昨日訳が分からなかったでしょ？それに園ちゃんも入れた理由」

「……………全然、意味がわからなかったです。」

「そりゃあそうね。だって説明してなかったもの。まあそんなわけだから、昨日のところにもう一回来なさい」

「いや、どんなわけですか？状況がいまいち飲み込めないんですけど」

「づべこべ言わずに来なさい。理由は後で説明するし、来ないと非道いわよ？」

「だからこの人の基準が全然わかんないっ！
「まあ行きますけど。理由も知りたいですし。ただ……」
「ただ？」

「……………昨日の場所が全然分かんないです」
「……………そう」

「……………なんかまずい事を言ってしまったよ
うだ。ヤバい。殺気を感じる。」

「まあ、そこら辺は気にしなくて良いかなあ。一応迎えをそつちに送るわ。もう着いた頃でしょ？多分」

「するとここで、ピンポンとチャイムが鳴った。ナイスタイミングだ。」

「今来ましたね。下に行ってきます」

『あ、なら電話切るわ。色々とめんどくさいし
ブツツ。と音がして電話が切れる。』

そして、ピンポンピンポン。とチャイムが連打されている。
一秒間隔で約二回。

「……………何なんだ、コイツらは。」

渋々、玄関を開けるために下に降りる。

ガチャツ。と扉を開けるとそこには、

「やほ〜〜」と、笑顔で手を振る昨日は見かけなかった

この時は居なかったの方が正しいのか？
女性が立っていた。

「……………ども」

軽く会釈。……………誰？

その女性は後ろで少しウェーブがかかったきれいな黒の長髪。服装は下が黒いタイトのスカートにニーハイソックス。上は半袖のカッターシャツを胸元で開けていて黒縁の眼鏡をかけているという、ラフな格好だ。年齢は二十代入ったくらいだろうか？目は少しおっとりした感じだけど、かなりの威圧感を持っている。胸の方は、まあ凹凸がしっかり付いていた。

そんな彼女はおっとり、だけど八キ八キしたしゃべり方をしていた。

「嫌ねえ。なんでそんなお先真つ暗な顔してるの？せつかく顔可愛いのになえ」

彼女は俺にはまばゆい笑顔を俺に放ちながら言う。てゆうか、俺の顔が可愛いというのは初めて言われました。

「それで？あなたはどなたなんでしょうか？」

「え、私？私の事、戦さんから聞いてなかったかしら？」

「イクサさん？」

「あら、ごめんね。違うの。戦さんじゃなくて椎孔さんね」

彼女は笑いながら言う。もしかして俺、すごい重要な事を聞いたんじゃない……………。

「今の忘れとかないと後で殺られちゃうからねえ、彼女に」

ニコツと笑う彼女。

・・・・・・・・・・・・・・・・忘れないと、大変な事にな
っちゃうらしい。

「それでまあ説明されてないのなら自己紹介よねえ。私は日ノ本
零《ひのもとれい》って言うの。可愛い可愛い紫ちゃんのお姉ちゃ
んね。まあ、あの子の事は周りからもゆかりんて呼ばれてるからそ
う呼んであげて。私の事は零で良いわ」

彼女はシスコンみたいだ、というのをさっきの説明に加えたいと
思う。

「んじゃあ零さんでも良いんですね？」

「あら、零さんだなんて・・・・・・・・・・」と言いかけて少し顔
を紅潮させている。恍惚な表情になってる。初めて見た。なんか工
口いよね、恍惚って表現。この人も素が結構工口いから余計・・・・・・・・

「あ、あのお？」

危ない危ない。自分もちょっとやばかった。零さんの事も危ない
方向に行きそうになってるので呼び戻す（もう充分危ない）。

「あら、ごめんなさい。私とした事が、つい」

彼女は笑顔。そして俺の背中を今、電撃が幾千か走り抜けたよ。
・・・・・・・・ヤベ。

「さて、それでは大和君の事を椎孔さんのとこまで案内しなくち
やいけないのよね？それじゃあちやっちやと行きましようか」

彼女は見かけによらずにせっかちなようだった。・・・・・・・・
・・・・・・・・せつかち？

再び俺は昨日来たところに戻ってきていた。次から椎孔さんに呼

ばれても自力で来れそうだ。
ガチャッ。

裏口の扉が開く。
扉の奥は少し暗い。

そしてもう一つの扉のパスワードを入れて扉を開ける。

すると、昨日のような喧噪が………

……無かった。あれ？

今日は昨日の事が無かった事になったかのように何もなかった。
綺麗さっぱり。何にも。

「誰も……居ない？」

シーンとした中呟く。

「そりゃあ毎日あんなバカ騒ぎしてるほど私たちもバカじゃないしねえ？あれは君たちが来たからよ」

零さんはおっとり口調で言う。

「いや、まあそうですね……。それじゃあ他の人たちはどこに行っただんですか？」

管理局に反対しているあんな人数の人間をどこに隠した(？)の
だろうか。地下室？……在りそうだ。

「みんな仕事よ？まあヒューマノイドになつてない人限定だけだね」……あの人達、働いてるのか。

「それじゃあヒューマノイドの人たちは？」

「他のみんな？今頃、戦闘訓練を行ってるはずだけど……？」
戦・闘・訓・練？

「ど、どこで？」

「この地下ね……」

違う意味で予想が当たり。この前と言い俺の勘は結構鋭いのか
もしれない。

「……地下っていつてもどのくらい広いんですか？戦闘訓練で
きるんならそれなりですよね？」

「んー、大体………半径二キロくらいかしら……」

「？」

「に、二キロ？」

声が裏返ってしまった。半径二キロって事は、ど、どれくらいだ？多分、恐山くらいはすっぽり入る気がする。

「あなたの想像してる通りだと思うわよ？裏山にすっぽり埋まってるわ」

ニコツと彼女はおっとり口調で言う。

すっぽりって……。どんだけ広いんだよ。

「そ、それじゃあなんでここに来たんですか？椎孔さん居ないじゃないですか」

「今から分かるわよ」

零さんはカウンターの壁に掛けてあったカレンダーを捲った。すると、

「す、スイッチ……。？」

スイッチがあった。

「これをね？押すと……」

ポチツとな、とても言うかのように零さんはスイッチを押す。

ガコツと何かがはずれたような音がした。

「な、え？え？」

これはすごい……。さすがすぎる。いや、もうこれは二次元の世界だろ……。ってくらいの光景が俺の目の前に広がった。

「凄いでしょう？これ、ホントにいくら使ったのかしら？」

本棚の在った場所は今、核シエルトの入り口になっていた。

「じゃ、行きましょ」

コツコツと零さんは歩き始める。俺は後ろを追いかけた。

「そ、それで、恐山ってここから結構な距離なのに何で行くんですか？この狭さじゃあ車とかムリですよね……？」

「いえ、車よ？あ、車擬きって言った方が良いのかしら？」

「は？」

疑問の声を漏らしつつ、俺は零さんに付いていく。

歩く事二分くらい。零さんの言っていた意味が分かった。

「これに乗るのよ」

二人乗り専用のジェットコースターみたいなモノが目の前には、あった。ジェットコースターと違うところは、屋根とかが付いてるくらいだろうか？

「これはね、ダブルスラスタ―って言うの。安心して？ちゃんとハンドルとかブレーキとか付いてるし、私専用の機体に乗れるなんてここでは滅多にない珍しい事なんだから」

ニコニコしている。・・・何を心配すればいいのだろうか？

「これに乗ったのは今まででも椎孔さんと私の妹くらいよ？」

「は、はあ」

零さんはそう言いながら自分の機体を見つけると黒い部分に指を乗つけた。指紋認識みたいだ。

「さあ、乗って？」

零さんに促されてダブルスラスタ―に乗り込んだ。お、席がソファみだいにふかふかしてる。

「じゃあ、行くわよ？しっかり捕まってるね？」

「え？ひゃっ！」

ダブルスラスタ―が静かに浮かび上がり始める。乗っている機体が急に動き出した事に少し変な声を挙げてしまった。一生の不覚・・・。

「ふふつやつぱり可愛いわね、大和君」

聞こえない聞こえない。今のは幻聴のはず。

「それじゃあ動かすわよお？準備は良いわね？」

と、零さんは馴れた手つきでダブルスラスタ―を操作し始める。

「う、運転上手いんですね・・・っ！」

「そりゃあ運転してるものお。上手いに決まってるでしょ？」

「・・・すいません。正直下手だと思っちゃいました。」

「さて、ここからがこの基地の凄いとこなのよお？」

零さんはそう言いながら少しスピードを上げる。

すると、出口みたいなものが見えてきた。

出口を超えると目の前には少しだけ信じられない光景が広がった。

「……………これが、基地か……………」

この街の地下にはこんな事になっているとは十六年間（いや、十七年間か）住んでいたのに全然知らなかった。ホント、椎孔さんの財力はどんだけあるんだよって感じた。

先ほどの通路を抜け出るとそこは、とりあえず空中だった。下なんか見えもしないくらい高い空中にダブルスラスタは浮かんでいた。そして、その空洞になっているところが中心となって、下に延々と続くフロアは螺旋状になっていた。部屋がとにかく多い。ここだけで独立国が作れるんじゃないかってくらいだ。

「ここにはね、まだ百人程度しか住んでないの。だから、その人達の部屋と公共で使うところ以外は何も無いわ」

零さんがニコツと笑いながら解説してくれる。

「だから、多分あなた専用の部屋も与えられるんじゃないかしら？」

「俺専用の部屋……………」

「ええ、そうよ」

……………正直、こつちに住まわされるなんて聞いてないんですけど。

「フロアの移動とかどうするんですか？」

「緊急用の階段とエレベーターとこの自分専用のダブルスラスタだね。でもダブルスラスタを運転できる人は少ないからエレベーターを使うか、ダブルスラスタで人を運ぶ役割を持っている人に運んでもらうのが多いわ。あ、ヒューマノイドの人は反重力装置を着けて自分で飛んでる人もいるわ」

「そ、そうですか」

最近のヒューマノイドは飛ぶのかっ？いや、ウチの学校にも居るから分かるけど。確か生徒会長さんとか風紀委員長さんとか飛んでた気がする。

「さて、第三会議室に行きたいんだから……あそこに着ければいいかなあ？」と、右斜め前の方向にある塀と塀との間に出ている出っ張りの方に機体を向けて動かす。そして、その出っ張りに機体を着けると、ダブルスラスタアのドアが開く。

「さあ、着いたわよ。降りて」

零さんはそう言つと、自分も降りて俺が降りるのを待つ。俺はドアを閉めた。

「それじゃあ着いてきて。ここ、結構入り組んでて迷路みたいになつてるから気をつけてね。一度はぐれると終わりよあ？」

「は、ハイ」

俺は零さんの後ろに着いていった。

～第三会議室にて～

「
と言う事から、フリードリヒ・ルツサー隊長率いる第五飛翔隊が先頭、つまりは特攻役をやってもらいます」と、私は静かに、かつ全員に聞こえるくらい透き通つた声を放つ。

「ちよつと待つて、紫さんっ！なんで私たちじゃないのっ？私たちこそ特攻役に相応しい筈ですっ！」と叫ぶのは、金髪のツインテールを持つ少女・マリー・S・ミツチエル。

「マリーちゃん、少し落ち着いて？じゃないと隊長は私が盗つちやうよ？」

マリーの隣で座っている少女・シドニー・ホーカーはマリーの頭を撫でながら言つ。

「何よっ！シドはあんな男に手柄を盗られちゃって良いのっ？あ、

あうっ……」

（撫でられるたびに顔が赤くなるのが可愛いすぎる……。ああもう存在自体が犯罪級よ、この娘）と、でも考えているのだろう、シドニーは少しだけ恍惚とした表情を浮かべながらもマリーの問いに答えた。

「仕方ないでしょ？ 椎孔さんが決めた事なんだろうし、マリーちゃんと一緒に居てくれれば私はもう何も要らないよ」

「あうっ……撫でるの……だ、め……」

顔を真っ赤にするマリーを見て、撫でる手が止まらなくなってしまっ。

「もう、マリーちゃん可愛すぎ……」

「ゴホンッ……！あの、二人の時間のところ悪いけど……」と、椎孔さんが仲介を入れた。

「まったく、だからガキは嫌なんだ。僕の悪口を言う前に君たちがどうにかしたらどうだい？」

マリーの向かいに座っている黒縁眼鏡をかけた青年・フリードリヒ・ルツサーはそう漏らす。

「……あなたも少しは自重した方が良いと思いますよ」

彼らの騒がしい様子を隊長格の中でもかなり冷静に見ていた女性・スロイス・マスタングは呆れながらフリードリヒに向かってそう言った。隣に座っている彼女と同じくらいの女性・グレイス・F・ヘルキヤットが最後に吐き捨てるようにこう付け加えて。

「……ただの子供向け菓子のくせに」

「っ」

フリードリヒが固まった。頭に血管を浮かべている。

「ハハハッ。フリッツって菓子が日本に在るだなんて想像もしてなかったんだろうなっ、このお菓子野郎は」

マリーは高らかに笑いながら、フリードリヒをからかう。フリードリヒは顔を引きつらせながら答える。

「こ、このガキやあシメてやんないと分からないようだなあっ……」

・！

「お？来るのか来るのか？」

「こら、ダメでしょう？マリー。フリッツさんだって好きでこんな名前じゃないんだよ？こんなお菓子みたいな愛称（笑）」

「~~~~~んのおガキ共はあつ~~~~~！」

「……………止めると言ってるのが分かんない？そこまで私より偉い存在なのね？その態度って事は」と、笑顔で椎孔さんは途中で割り込んだ。場の全員が固まる。

「うん。それが出来るんなら早くやってね？殺すわよ？」

最後に物騒な言葉でしめる。だが椎孔さんならば本当にやりかねないだろう。

シドニーは他の人たちには聞こえないくらいの音量で、フリードリヒの右隣（シドニーから見て）の女性・ハインリッヒ・ホッケウルフに話しかけている。

「……………お互い大変ですね」

「……………ね」

そして、彼女たちの会話に気付く事もなく、椎孔さんはさっきの説教のテンションが嘘だったかのように私に言った。

「んじゃあ続けて？ゆかりん」

「え？あ、ハイ。わ、分かりました」と、私は少し突っかかりながらも 私にしては珍しい 続けた。

「そ、それでは次に右翼側、西入間市上空からスロイス・マスタング第三飛翔隊長率いる第三飛翔隊が、中央、入間駅前上空からは私、日ノ本紫率いる第二飛翔隊が、左翼側の東入間市上空からはマリー・S・ミッチェル第四飛翔隊長率いる第四飛翔隊が、そして最後方のサポート役をお姉ちゃ……日ノ本零第一飛翔隊長率いる第一飛翔隊、というバランス重視の隊列で攻め込む形になります。隊列が崩れた場合は各自対応して下さい」

いつものようにお姉ちゃんと言いかけたが、気にしない事にする。「と、言っわけよ。良い？これが正規軍との衝突するための基本

陣形よっ！文句は言わせないわ。良いわね？」

『・・・・・・・・』

全員固まったまま返事をしない。

「良いわね？」

椎孔さんは笑顔で言葉を繰り返す。さっきよりも少しトーンを下げて。

『・・・・・・・・ハイ』

全員の顔が真っ青になっているところで会議は幕を閉じた。

著 日ノ本紫 『会議専用日記』よ
り第六十二回会議の内容から抜粋

～第三会議室前にて～

気のせいだろうか？会議が凄い気まずい空気になっているような気がする。と言うか椎孔さんが怖いのだが。

「あの・・・・・・・・」

「・・・・・・・・言いたい事は分かったわ。いつもああよ」

「そ、そうですね・・・・・・・・」

何だろっ？零さんも少し身体が強ばっているようにしか見えない。
・・・・・・・・あれ？震えて、る？

「こ、怖くはないのっ！ただ宵椎孔さんの覇気が凄いだけ・・・・・・・・」
・・・・・・・・怖がっているようにしか見えませんか？

「と、ところで会議が終わったみたいなんですが、入っても良いんですか？入り口に固まってちゃ邪魔になりませんか？」

「そ、それもそうね。それじゃあ入りましょうか」

そう言うと、零さんはコンコンと会議室の扉を叩いた。音からも分かるようにやっぱり中にはいるのが気まずいみたいだ。・・・ん？気まずいのか？

「はあい、どうぞ」と、間延びした椎孔さんの声が聞こえてくる。さっきの覇気が微塵も感じられないくらいに。

「し、失礼します」と零さんは中に入っていった。俺も続く事にする。

「あら、ようやく来たのね、大和君。丁度良いとこに来たわ」

「ようやくつてさっき電話貰ってから小一時間程度しか経ってないですよ。それに現在進行形で会議みたいじゃないですか」

「ハイ。今丁度、次の戦闘に備えての会議をしていました」

「会議してたの知ってるんなら、零も聞いてたわよね？今の内容」
「聞いてましたけど、トラウマが蘇って頭に残っていません」

椎孔さん怖すぎなんですよ」「零さんは少し泣きそうな声で言う。
トラウマだったのか、さっきのは。

「お姉ちゃ・・・零隊長は最後方のサポートです。今回は長期戦になるかもしれないから、少しだけ体力温存して貰わないと困っちゃ・・・困りますから」

紫さんは噛みながら理由を説明してくれる。なんだ、この人。・・・物凄く萌えてちゃうじゃな、ゲフンゲフン。

すると、会話に入ってこれなかった会議の主要メンバーの一人の金髪ツインテ少女が、持っていて当然の疑問を投げかけてきた。

「ところで、こちらの殿方は誰なんですか？すごい気軽に椎孔さん達と話してるのも気になるんですけど・・・」

「ああ、そう言えばあなた達は昨日居なかったわね。紹介するわ。この子は秋風大和、あなた達にも一応説明してるはずだけどね」

『・・・？』

全員が全員驚いた様子を見せている。そこまで驚かなくても良いと思うんだが。

「えっと・・・あ、どうも」と、とりあえず会釈する。

「そ、それで・・・」ツインテ少女はなんとなく合点がいったような顔をしているが、俺の方について行けてないと思うのは俺だけだろうか・・・？

「まあ、とりあえず全員席着いて。あ、大和君は私の隣に居て。色々具体的な事情説明するから、多分ゆかりんや零から聞いてるだろうけどさ」

「具体的に、ですか？」

「ええ、そうよ。いきなり連れてこられて、こんな訳分かんない連中に何しでかされるか分かんないだろうしね」と、そう言いながらニツコリと微笑む。

「・・・なんかされるんですか、俺は」

「される、と言うよりはするが正しいんだけどねえ。うん、まあそこんところは今から説明するから、とりあえず座りなさい」

とりあえず今鬼神が見えた。・・・なんで！？俺なんかした？という疑問から俺はこう言う事にした。

「ごめんなさい。とりあえず座るときです」

「分かれれば良いわ」と、再び微笑むのが怖いのだが、鬼神は去っていったようだ。安心安心。

「それじゃあ、とりあえず色々と言いたい事はあるんだけど・・・これだけは言っておいた方がいいかしら？」

「何です？」

「今から約二十年くらい前に第二次日中戦争が起きたのは、分かるわよね？」

「ハイ、確かロシアが止めたんですよね？」

「そうよ。一年も経たずに終わった戦争。まあ、原因となったのはその頃の政府の対応が悪かったせいなんだけどね」

「それで、その戦争がどうしたんですか？」

「それじゃあその戦争のおかげで、このヒューマノイド化計画、通称【計画】が起動したのは知ってる？」

「え？そうなんですか？知らなかったです。というより、通称なんてあつたんですね、それ」

「まあ、聞いて。それじゃあその計画を始めた人っていうかその計画を発表した人って知ってる？」

「え？つと確か、関ヶ原、とかいう名字の人ですよ？」

この話なら有名だったから、俺でも知っている。発表されたのが俺の産まれる約一年前のだった気がする。

「そう、その関ヶ原さんのおかげで 計画は始まったんだけど、その関ヶ原さんって教科書には名前しか載ってないでしょう？多分写真は載ってないはずよ」

「ハイ。乗ってなかったですね」

「そう、何で分かる？」

「分かんないです」

「それはね、彼女はまだ生きてて、革命軍の人間になったからよ」

「……………は？あの、確かその人って殺されたんじゃないかなかったですっけ？」

俺が習ったときはそう教えられた。というか革命軍？

すると、椎孔さんは間を空けてこう言った。

「いいえ、生きてるわ。彼女、と言うよりもこう言った方が分かるわね。だって、関ヶ原って私の事だもん」

「……………いえ、あの、そう言われたって信じれないんですけど……………」

「だから、私が関ヶ原なんだって。関ヶ原戦が私の本名。それにこの基地にあるものでも大抵は今の技術じゃ作りえないものばかり

のはずよ」

「・・・思えばそうだ。この基地にあるもの、かの関ヶ原戦でないと発明できる代物が一つもない。例えば、ダブルスラスタ」。

「ま、マジ、ですか・・・」

「マジです」

頷きながら答える椎孔さん。なんてこった。それに革命軍、納得だった。

「で、私があなに言いたいの、あなたに革命軍の実質的なりーダーになってほしいっていうか、管理局に対して私たちが喧嘩を吹っかけて最後の決着の切り札にあなたを使いたいっていうか」

喧嘩？き、切り札？何の話をしてるんですか？

「まあ、これは確認のためで、確定していることなただけだね」

「いやいやいやいや、ちよつと待ってください。意味わかんないです。管理局に喧嘩？俺が最終的な切り札？きちんと説明してくださいよ」

「ごちゃごちゃうるさいわね。ゆかりん、説明してあげて」

話を振られてビクツとなった紫さんだが、すぐに説明を始めた。

「つまりですね、私たちI・X・Aは管理局の正規軍に対して革命を起こそうとしているのです。そして、相手が確実に使ってくるであろう《第四世代》の対抗馬としてあなたが選ばれたのですよ。まあ詳しいことはそのときになれば分かると思いますけど」

「ふ、《第四世代》…？そ、それってまさか新世代のヒューマノイドですか・・・？」

「まあ、そうですね。まず私たちのような低世代ヒューマノイドでは確実に勝てません。束でかかっても結果は変わらないと思います」

「いや、そんなの相手に俺が勝てるわけないでしょう！？生身の人間ですよっ？」

「それには、心配及ばないわ。多分戦わなくても勝てることになるから」

椎孔さんが途中で口を挟んだ。

「それはどういう」

「あなたはまだ知らなくてもいいわ。いずれ知ることになるでしょうし、あっちから接触してくるだろうしね」

「いや、それはないでしょう!？」

「ゆかりん、続けていいわよ」

話を無視するな。

「あと、私たちが喧嘩を吹っかけるといふ表現ですが・・・」
少し溜めた後、紫さんはI・X・Aの目的を言い放った。

「私たちはこの町に対して、革命を、戦争を起こそうと考えています」

第三章（後書き）

やっと彼らが登場してくれました。

いやあ、これでストックがなくなったわけで・・・
また10000字程度を書くのは辛いなあ・・・泣

次話報告しますと、多分次は管理局側の人間が出てくるんじゃない
でしょうか？
話が違どうぞ、とかなったらごめんなさい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5719u/>

HUM@NOID

2011年11月16日13時37分発行